



医師会は任意加入であるので、医師会への加入率は組織の力を表わすとともに、組織としての魅力を表わす指標の一つと考えられる。平成24年現在、北海道内には約1万2,500人の医師が登録されている。そのうち北海道医師会の会員は約8,400人、さらに減って日本医師会の会員は約6,000人である。3層構造である医師会の上部ほど加入率は低下する。このデータは看過できない数の医師が北海道医師会、日本医師会に加入せず診療を行なっていることを示している。最近の両医師会の組織率は加入者低迷により横ばいか、あるいは低下傾向にある。

医師会の組織率低迷を考える

— 加入率は増加するか —

情報広報部長

山科 賢児

医師会加入率の低下の要因に、第二次世界大戦時に医学専門課程を卒業した多くの医師たちが高齢化のため廃業し会員数が減ってしまった現状がある。その減少を世代交代によってその穴埋めができていないこと、特に地方の医療を支えてきた医師たちに若い世代の後継がないのが地方医療を危うくさせている。さらに加えて日本のどの組織も若い世代の組織率は低迷し、その解決が喫緊の課題となつてきているように、日本の医療の将来を担う医科大学や大病院の若い世代の勤務医の加入が増えない実情もある。

医師会未加入の医師たちに医師会の話をする

ると、「高い会費を払つてまで医師会に入会するメリットはあるのだろうか」と逆に医師会不要論を述べられることが多い。また既に医師会に入会している医師からは「加入による恩恵を実感することは少ない」と聞くこともある。会員と医師会の双方を念頭において職務を果たすべく努力しているつもりだが、このような声に対し明確な回答に窮するの事も事実である。

個人的体験を言えば、研修医、勤務医の時は、日本の医療保険制度をよく知らずに診療を行なっていた。保険制度の医療への制約は患者のための医療には障害になるのではと感じることもあった。それが

いざ開業医の立場になつた途端、診療報酬請求の方法をはじめ、日常の診療が医療制度の範囲の中で行われる厳しい現実に向き合わなければならなくなり、そこで初めて医師会の存在を意識するようになった。

最近の若い世代の医師の専門医志向が顕著に物語っているように、どの医師にとつても医師としてのキャリアを高めることが一番である。しかしそれを実現するには日本の医療保険制度を理解していなければならぬ。それならば専門医を目指すためにも、将来開業医・病院経営者を目指すにも医療制度の現実を早めを知るのが必要であり、同時に今の皆保険制度の崩壊を防ぐことにもなる。さらに医師として活動している環境基盤には医師会が深く関与していること、診療報酬体系は医師会の努力によって確立されたことを知る機会があつてもいいのではないだろうか。しか

し如何せんそのような情報をお互いにやり取りしたり、実感したりする機会はないように思える。

また医師会の会費の額は加入の敷居を低くするために大切な問題である。今の会費制度は医師の収入の変化、賠償責任保険が多様化している時代に対応していないように思える。ロビー活動に資金を使うと同様に、若手医師の医師会加入問題に多くの予算と労力を投入するくらいの医師会側の意識も必要であろう。

一般的に市民向けフォーラム、新聞、テレビなどのマスメディアを用いて医師会の主張を理解してもらい、その実現の橋渡しをするのが医師会の広報と思つている方々が多い。もちろんそれに異論はないが、今必要なのは医師会が会員は何を望んでいるかを把握し、会員に何をしようとしているかという医師会からの説明が十分になされる組織内外への広報ではないだろうか。言い換えると組織内部の活性化と、未加入の医師たち、特にこれらの医療の中枢となる若い世代の医師との結束である。国民に対する広報は疎かにできない。組織内部でのコミュニケーションがよくなければ、国民などの外部とのコミュニケーションはうまくいくはずがない。

自信を持つて医師会加入のメリットを示す時は来るのだろうか。医師会を一体感、高揚感を共有できる組織と語れる日は来るだろうか。今の時点では「実際に入会して、参加して、実感してみたい」と思っている。そして問題を共に解決していきましよう。そうすれば医師会は会員にとつてメリットがあり、恩恵を感じる魅力的な組織になります」と答えた。